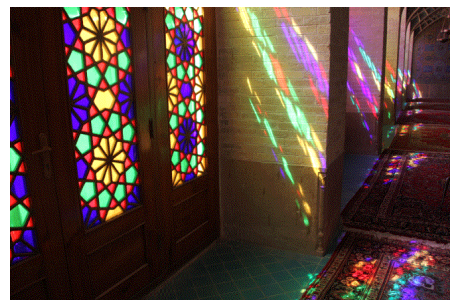


テーマ **等身大のイランを発見する**
 ～生活する中で現地理解を深め、イランのよさを体感できる教材づくりを通して～

キーワード ・「イラン人の半分は優しさでできてる」 ・「ペルシャの歴史」
 ・「働き方の違いから見るイラン人の幸福感」 ・「いじめのないイランの学校」

1 概要

イランは、欧米諸国による対イランの経済制裁・金融制裁が年を追うごとに強化され、世界の注目を集める中近東に位置する国である。しかし、一方的な情報しか入ってこなかったり、情報そのものが少なかったりするため、「得体の知れない国」であるとか、「危ない国」であるとか、「神秘的な国」であるとかのイメージしかないのが現状である。そこで、実際の生活をする中で本当のイラン（等身大のイラン）を調査研究するとともにそれを教材化し、イランでの生活の難しさからイランを否定的にみる多くの児童生徒が、現地理解学習の中でイランのよさを体感できるように努めた。



赴任中の3年間、欧米諸国による対イランの経済制裁・金融制裁が次々と強化され、イラン国民の生活も限界に達し、2013年には学校の周りの治安もこれまでには考えられないくらい悪化した。また、経済活動が制限されたことから日本企業内の邦人の削減も進み、どの企業も1名から数名を残す体制になってしまった。結果として日本人学校の児童生徒数も2011年約40名、2012年約20名、2013年約10名と3年間での四分の一になった。さらに、2011年末に起きたイギリス大使館・イギリス人学校へのデモ隊乱入・立てこもり事件、イスラエルによるイラン核施設へのミサイル攻撃の可能性（実際に2011年10月には一時的には核施設が制御不可能になるサイバー攻撃があった）など、いつ何が起きてもおかしくない日々が続いたが、学校内の児童生徒には不安感を与えないよう明るい学校づくりに努めた。



しかし、2013年8月以降は、イランにとって明るい話題が多くなった。また、校内的には2度にわたる「校舎借用契約の値下げ交渉」にも成功した。予断は許されないが好転の方向に向かっている。

2 イランのイメージ

2011年にイラン・テヘラン日本人学校への赴任が決まった時、周りにいたものからは驚きの表情が伺えた。なぜ驚くのか。それはもしかすると「驚き」ではなく「恐怖」や「不安」なのかもしれないと感じた。恐怖や不安を抱く原因の一つには、イラン人が過去に携わった「偽造テレカ」や「麻薬販売」が影響していたり、メディアが作った印象があるのであろうか。確かに、アメリカのブッシュ大統領の「イランは悪の枢軸」発言より以降、メディアによる各種報道があったことも考えられる。

しかし、実際に生活してわかった本当のイラン（等身大のイラン）について、正しく理解し、教材化することによって、イランでの生活の難しさからイランを否定的にみる児童生徒に対し、現地理解を深め、イランのよさを体感できるよう努めることが大切であると考えた。

イランは、2014年6月に新大統領が選出されるまでマスメディアから敵視されていた。そのことは日本のメディアの現地特派員でさえ、イランに関する報道をする時、「イランのプラス面を知っていても、マイナス面の報道しかできないこと」に苛立ちを感じていることであった。

現在、イランという国について、日本人はどんなイメージを持っているのであろうか。おそらくテレビなどの報道を通じて、「核開発」や「反米主義」などを思い浮かべるかもしれない。もしかしたら物騒な地域と思われている人もいるのではないか。しかし実際にイランの地で生活してみると、「イランの人は「すぐく親切」であり、「トルコ人と同じように親日的」であることに気づく。「イラン人の半分は優しさでできてる」とさえいう人もいるほどである。また、イラン人のほとんどが親日派である。



「イラン人による日本のイメージ」

- ・日露戦争などを戦って独立を全うした国
- ・第二次世界大戦の敗戦の中から復興に成功した国
- ・「おしん」の国
- ・パーレビ国王が『白色革命』の合い言葉に『西の日本たれ』を使ったほどの国
- ・「伝統的な友好関係」…欧米が圧力をかける中でも石油を買い続けた日本
- ・時間を守る国民 ・協力して仕事をする国民 ・礼儀を重んじる国民



他にも、日本の学校の子供達が自分たちで掃除をし、給食を配膳していることや、東日本大震災における日本人の規律ある対応などが、イランのテレビで放映され、イラン人に感動を与えている。また、テレビでは「おしん」の他に「一休さん」、「キャプテン翼」などが放映され、高い人気を呼んでいる。

これに反して、自分の周りには日本人によるイラン人のイメージは、「戦争」、「恐怖・不安」、「危険」など現実的な問題が多く、暗く・マイナスイメージのものが多くある。イメージの中には、「イラン」と隣国「イラク」が混同するなど、事実と異なる認識もある。さらには、「不法滞在」などのイメージのように、20数年前の問題を理解しているものまであった。

しかし、イランを名乗る前の「ペルシャ」といった場合は、堅いイメージのある「イラン」から考えるとわかりやすいイメージのものが多い。

また、アラビアンナイト（千夜一夜物語）とそれに付随する「エキゾチック・神秘」、「魔法」、「御伽噺」や、「歴史」、「遺跡（世界遺産）」、「古代文明」、「シルクロード」、など歴史や神秘的な明るい、プラスイメージが現れていた。

3 イランと日本の歴史的結びつき

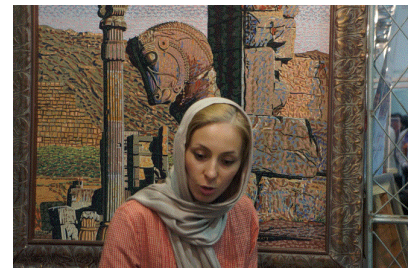
(1) 古代からの結びつき

このプラスのイメージをきっかけに教材化した。

赴任してすぐに、考古学博物館に行った。5000年前、6000年前の遺物がガラス等の仕切りもなく展示されていることに驚く。日本とは比べ物にならない歴史の深さを知る。キュロス2世からアレクサンダー大王に破れるまで、世界最大の帝国を紀



元前550年に築き、奈良時代にはシルクロードの西と東で繋がっていたイランと日本。その後、時を経てゾロアスター教を国教に建国したササン朝など「ペルシャ」の歴史は1935年まで続く。正倉院にはペルシャ渡来の漆胡瓶や白瑠璃碗（はくるりのわん）が奈良時代に収められている。シルクロードの東端に位置する日本は古くから「ペルシャ」と交流をしていたのである。



白瑠璃碗は大仏に奉獻されて正倉院に納められてから1250年の間、当時の姿をとどめている。高さが8.5cm、さし渡し12cmほどのこのガラス器は、今では何億円もするものである。

教材1 「ほうれん草」を漢字で書けるだろうか？ 答えは…「菠薐草」

「菠薐」とは中国語でペルシャ（今のイラン）のこと。ペルシャからシルクロード

えられたことから、ペルシャの草、「菠薐草」と呼ばれるようになったそう

字で書くと「菠薐草」、菠薐とは中国語でペルシャ（今のイラン）のことで、

シルクロードを経て中国に伝えられたことから、ペルシャの草「菠薐草」とな

また「胡」という字は、唐の時代になるとペルシャ人をさすようになる。「胡姫」というのは胡の姫、つまりペルシャ人の女の子です。「胡椒（こしょう）」「胡麻（ごま）」「胡瓜（きゅうり）」「胡桃（くるみ）」「胡豆（そらまめ）」も「胡」の付く物のほとんどはペルシャ経由で伝わってきたものだと考えていい。にんにくは「胡蒜」と書く。

でも「胡椒臭い」も「胡」と書く。ペルシャ人が散ると怪しいということだろうか？

その「ペルシャ」は現在「イラン」と国名を変え、古代遺跡、壮大な宮殿、8箇所の世界遺産、イスラム教寺院、ゾロアスター教寺院、美しい庭園、多くの博物館、各地にあるバザール、など多種多様な観光資源を有する国となっている。



その他、観光資源の中から教材化したもの

教材2 「ペルセポリスってどんなところ」

教材3 「王様のつくった公園」

教材4 「元気いっばいのバザール」

教材5 「カナート どうやって水を運んだのか」



(2) 欧米が圧力をかける中でも石油を買い続けた日本

教材6 「日章丸事件」 (出光興産社史等より)

1953年イランの原油が国際市場から締め出された時期に、日本の石油会社のタンカーがイランの港に入港し、原油を買い付けた。これが「日章丸事件」である。

また1979年のイラン革命によってアメリカとイランが国交を断絶し、アメリカが各国のイラン外交に圧力をかける中でも、イランから原油を買い続けた。



欧米が圧力をかける中でも石油を買い続けた日本のことは、ほとんどのイラン人が知っていた。しかし、それだけに2011年、2012年に日本の石油買い付けの自主規制が日本から発表され、それがイランの新聞に載った日には、自分自身、学校からの退勤時、2グループのイラン人に取り囲まれ、怖い目にあったのも事実である。

4 働き方の違いから見るイランの幸福感

(1) 労働の仕方の違い

現地スタッフの雇用管理も校長の仕事となっているが、日本人とイラン人の働き方の違いには最後まで苦労した。日本での常識はイランではそうではなかった。

イラン人に「日本人の働き方とイラン人の働き方の違いは何か」を言わせるとその実態が明らかになる。「時間を守る。」「約束を守る。」「真面目に働く。」「一生懸命に努力する。」というのが日本人の働き方の評価である。つまりイラン人の働き方はそうではないということである。

なぜ日本人はそんなに働くのかと聞かれたことがある。それに対しては、「あなたたちには石油や天然ガスといった地下資源があるだろうが、日本にはそのような地下資源がない。そのため、いいものをつくって、サービスをよくして、一生懸命働くほかないのです。」と答えた。つまり、「イラン人は、地下資源が豊富にあるから、働かなくても生活できる。だから怠け者になる。」と想像していたわけである。



しかし、それは間違えであることに気づいた。確かに上記の考えも、アラビア半島にある国民が極めて少数の国(UAE=432万人、カタール=74万人、クウェート=275万人 2004年)においては正しいことかもしれない。しかし、人口7000万人(2006年)のイランにはあてはまらないと考えるようになった。

そのきっかけは、テヘランで毎年開かれている日本語弁論大会で、「日本人のいいところと悪いところは何ですか」と聞かれた出場者が言った一言である。「日本人は大変まじめで、しっかりと仕事をする素晴らしい民族です。でも家族を大事にしません。」つまり、イラン人は「怠け者」ではなく「楽しく暮らしたい」国民なのだということである。

確かに、イラン人は家族といる時間が長い。働いている間でも、家族に一日10回以上電話をする。木・金の休みの日は、必ず家族と過ごす。(20代の青年も休みの日は父母祖父祖母とともに公園で一日を過ごす。)イラン人は家族を大事にし、楽しく暮らしたいので、仕事は次の次である。あるイラン人は、「日本人は、生活をするために仕事するのではなく、仕事のために生活をしているように見える。有給休暇は一人ひとりの権利であることをそれぞれには理解しあっているが、有給休暇でさえ、気楽に取らない。休みを取ることに罪悪感さえある。」とさえ言う。自分たちのしていることを考えさせられる一件となった。



(2) 歴史的背景

古代イランは他の国によって頻繁に侵略された。このため、イラン人は次第に「未来」のことよりも「現在」のことを大事に考えるようになった。そして、「明日」を心配することより「今日」を楽しむことを優先する考え方が今に残ってしまった。また現在においても、紛争や政治的転換が起きたとき速やかに逃げ出すためには、他人のことを考えている暇はない。自分を最優先するのが当然だ。という考え方もありそうである。

(3) イランの休日

イランの休日は、ノールーズ(正月休み:西暦の3月21日始まり)をはじめ、イラン独特の伝統的、国家的な休日(年間9日)に加え、イスラム教に関わる休日(年間16日)、さらに木曜・金曜の週末(年間100日)の合計125日と有給休暇(年間26日)を加えれば1年間に151日は休日となる。つまり1年の41%は休日である。これをイラン人は家族のために使うのである。

5 いじめのないイランの学校教育

(1) イランの学校制度

○学制について

義務教育が12年間であり、高校までは「教育省」が、それ以上の高等教育は科学技術省の管轄。この教育省の中に国際教育課があり、外国人学校は全てのこの課の指示に従うことになる。

○予備学校について

多民族国家なので、地方によってはペルシャ語とそれぞれの民族語の両方を話す子供もいるが、ペルシャ語のわからない子供は予備学校で習ってから学校に入学する。

○学費について

小学校から高校までは、授業料は無料である。

○男女別学について

小学校から高校まで全ての学校は男女別学となり、大学は男女共学。女子が男子の前でスポーツをしたり、歌を歌うことなどは禁止されている。女子校の敷地の中では許可される。このためテヘラン日本人学校でも、男女一緒に行う校外の体育や運動会の実施の際には、特別な苦勞があった。



(2) いじめのない学校生活

イランの学校で最も特徴的なことは、「イランの学校にはいじめがない」ということである。

もちろんイラン人であっても、異質な物に対する反応はあり、出身地方ごとに相手を小馬鹿にしたり（特にテヘランっ子は、北方や南方出身者を田舎者扱いする。）、IDを持っていないアフガニスタン人やクルド人を下に見たりすることがある。しかし、社会においても、学校内においても、それらの人をいじめるといった行為は全くない。同じ人間であるという意識が非常に強い。社会においては、一部の金持ちが家庭内でハウスキーパーなどの使用人を雇用することがあるが、雇用主と労働者との関係があるだけで、人間的には対等であり、互いに人間として尊重し合っている。また学校内においても、当然仲のよいグループは形成されるが、その他の物を排除するといった行為はない。どれどころか。一人で困っている子を見かけると必ず誰かが声をかける。助け合うことは当り前の行為であると誰もが信じている。喧嘩はあるが、日本のように大勢で徒党を組んで特定の人をいじめることは考えられないという。

反対に日本から帰ってきたイラン人の子供のほぼ100%の子が、日本在住時、日本人からいじめを受けており、日本における「いじめ」の実態は、イランにおいても有名になっている。

あるときイラン人から「東日本大震災の時、商店への略奪もなく整然と整列して救助を待って、世界中を驚かした日本人。何の見返りもないのに人助けをするのは日本人。それなのになぜ日本は、国会で「いじめ防止対策推進法」のような法律までつくるような事態になっているのですか。」と聞かれた。

イラン人にいわせると「日本人は協働して仕事をするのがうまい。一つの目標に向かって一緒に動くことができる。しかしその協働性が大勢で徒党を組んで特定の人をいじめる日本のいじめにつながっているわけではないだろう。」という。

「学校の掃除を児童生徒が自ら行うすばらしい日本の教育」「困った人に無償で手を差し伸べることのできる日本人」「あらゆる所に交番があって治安がよい日本」なら、イラン人にも誇れるいじめのない日本が作れるはずである。

6 その他 イラン理解のために作った教材

- 教材7 「文法がにているペルシャ語」
- 教材8 「イスラム国家でちがいがあがる 女性の服装」
- 教材9 「ノックの音だけで客が男か女かがわかるイランの住宅」
- 教材10 「イランにもあるコタツ文化」
- 教材11 「砂漠で暑い日々を過ごす工夫 「バードギール」と氷層」
- 教材12 「日本人に喜ばれるイランのお土産」
- 教材13 「最高の雪質のイランのスキー場」
- 教材14 「カシュガイ族のつくる「ギャツペ」の魅力」
- 教材15 「とても高価な サフラン」
- 教材16 「イランの石油と天然ガス」
- 教材17 「イランの体操 ズールハネ」

